

5
804
4

第一



七七
フ

書
804
4





戊戌
標
九筆也

○前冊封廻状ノイラ云テ渡辺某カ云云ノ次ニ高野ト云者
ノ記セル夢物語其書ヲ視タク思タルニ幸朝川島ガ傳字
者ヲ得テ茲ニ移ス其書記者ヲ出サレト云云戊戌夢物語ト首
標シ終ニ其冬十月庚日ノ明日ト云然レバ今歳ノ前年ナリ斯
ルニ今日ニ至テ一拘事莫シ己亥ノ十一月廿六日戌時識

戊戌夢物語

冬ノ夜深ゆゑ海ノ水澄々として寝る者稀小御言まつはる
ゆゑ風の音すゝ海ノ音と物すゝき小御言まつはるに眼を
て楊柳の傍り宛をぬけて書を読むるに寝たかゆぬといつゝ目も
昏も昏倦て夢と物と幻とを恍惚とらねぬ一或る方へ松の葉とい
廣地を歩み笑つけれ、碩学諸儒とかは、きん、数千人集會、色々の物
しゆりたるを因又甲の人の人亦向て言る、進某、此夢を言たりイキリ

ス國のモリソンとふとの隙となりて船を仕せし日本漂流人
七人を乗せ江戸近海に船を寄せしを餌として交易を願
ふ由和蘭院中にもんもイギリスとふ國のいづる國よ
かこの人答るイギリスと中國の和蘭院の北にある嶋よ和
蘭院の王都アムステルダムとヤルより海上百十六里斗隔り順風
の時一日一たび位も私通用しを所て國の大きさを日本
程も有る由をいふとる國の一人教は日本より少く想括
して人口千七百七十万人とヤル國人敏捷諸事亦勉強
て倦怠をも好んで文学を勤め工技を研究して武術を煉
磨し民を富し國を強しするを先務としは多濱海
浅灘暗礁多く外寇入難く自近來エウロップ大亂の時よ
尚てもイギリス孤立して國民干戈の災免れられ國都

ロンドンとヤルに於て繁昌の所あり街坊羨希人戸稠密して
人口凡百万人斗も塔由海運と都合宜敷所ありて多諸國
よ交易をいふ諸國は航海仕不毛を開た人民を蕃殖し
夷人を教道して土を服従仕け節よむして外國領分の
人教は七千四百二十四万とヤルを得る本國の四倍ありし申し
を玉この名は北アメリカと唱へて南アメリカは西側は印度
二西印度と名付めて南アメリカと北アメリカ此間の處は有る
三アフリカ洲の内をて天竺は南西は南アフリカは南西は南アフリカとヤル
と申し日本は極南にありしを領しは五南アメリカとヤル
フラシイ國名ゴイ子ア并カルホルニア處ありて日本の東にありしは

瘴の六天竺内モゴル極と唱の國の内まで雲南暹羅北南
に五瘴七八東天竺と申して日本近海北南北諸島無人島近
所より南北島の五瘴以上の國々夫々諸役人其差向け支配為
仕ぬ故其者其れ乘の船ハ軍艦として一艘石火矢四十備へ
ぬものをして造り重き一由の五瘴の舟船數ハ二万千八百六十艘と
申し其船は常りの上役人の都合十七万八千六百二十人下役人の四十
万六千人水主崑崙奴炊奴亦取集り惣括百万人程も可有る據
以廣大の事は亦少く右の自然航海術并水軍ハ殊の外
熟煉仕ぬ外國出帆處亦ハ廣大に在り交易の道ハ漸々旺
盛に在り凡五大洲中既駢無極に在り諸國のものは亦

事と恐れ羨み申し由の五瘴の支那も前々交易仕ぬ付廣
東の側は地所を給り商船を營み右の惣督并諸下役人曾
出置年々南海諸島并アメリカの産物を集め數十艘も積
蓄廣東へ輸送し専ら茶と交易仕ぬ本國へ送る事
又五瘴の處ハキリスと云南暹羅の領分所有る支那北
屬國の界を接し其付邊民共擾亂仕界を越互に鬪争接
戦仕ぬ事時々有る故支那人ハキリスを疎み申し加ふるハホルト
カル即日本南
蛮ト唱ハ和蘭人亦ハ廣東へ回極に交易仕ぬ付キリスの交
易盛にお坐り得る自然各自已に衰微もお坐り故も言
言成構へ種々誹謗仕ぬ付元方ホルトカル和蘭院も清朝華

命之頃大功の有る大に廣く地面を給り外より親交の
之故存右謬を信し當分イキリス公忌憚られ交易のハ
捌方し不宜既乾隆年の末貸しの日増り多しお成交
易方仍立ふ申ねるに仍る本國より色々評義をい
し已来廣東交易お休む方の然おやし説も有るに度近來
イキリスより茶殊に外流の仕人にお用ひ故存支那交易お休
むに右缺乏のし人々迷惑にお成る且又イキリス領南海諸島
天竺及アメリカカ邊茶の多く有るを得世を品支那の産より
遙より下り宜しは上一旦右向は合は程津山とせし産
し不申の事よつき交易おやまみし事にお成るのし依る

る誠又評成改しは度右交易のし不取捌は廣東下及人々所為
ありて全く支那帝の意は出ぬ事は毎に格考の進むに付し頃
嘉慶帝誕生有るに右誕生を賀しみし物故北京は早しと
名し使節をきり直帝へ愁訴仕は方の然し事よ一決仕は
る本國より人物を擡み口上カレテ子イとヤ者を擡よありし使
しは天文地理醫術物産の支那より未熟の由に付右熟煉上達仕
者故急らみ同船仕らせ右の關係仕は書籍の勿論諸器諸物に至
迄一切おとのしを外支那通譯のもの迄お擡し使副使の船各
一艘兵糧船案内の都合四艘より本國より乗出しを序日本
朝鮮のし交を結し度國王の書簡お添きし由おし中し右め

廣東交易に極子宜敷お事は度近來より廣東に有るは西洋
諸國より高致中イキリス致尤巨大にお事や甲申人問て曰モリン
と申るは少く者ら申るは弟度ハ乙申人曰く随分少及はもの
ハ度ハ右ハ元來イキリスにて碩学宏才の者付彼國學校に教授
擢られ俸祿五六千石は尚程ものハ申る度イキリスの支那は
嫌忌卑蔑せられしを歎き右ハ全く言語文字お通しらずは故
の故と存右お通し極仕度存意あり二十餘年前より廣東
態に秀哉遊学は既五車韻瑞おもイキリス語は翻譯しあり
開板は漢学出情仕可なりハ文章を書ケル極にお事近來より
ハ余程高名に秀事あり官位に進み職も重し用らるる廣東交

易吏は惣督とらふお事南海中諸軍艦一切支配仕は申付
少ありハ水軍三万位は撫育仕極お事ハ尤も此方の四五
万石は大名位に事可有之かと存し申人又曰く元來漂流
人々は和蘭陀人ハ託し送りし極に仰渡お事ありハ
キリスハ和蘭陀隣國に故付右ハ心得居の申し既に先年備
前ハ廻船イキリス領の天竺處へ漂流致は度イキリス人是故和
蘭陀に渡し送りし事有るハ然るは度態々自國の船
又乘且又右漂流人送るは送るは船に何者有るハ可然る交
右極高官重職のモリンと申者取仕は送りし事一向
合黙行き不申しは高見しは是度藏るハ話しつせは

下度此の人曰く何様事かは深き子細可有るべし但しイキ
リス人は面會承り不し事を得る事事情確知 廢るべし
愚意を以て臆裁は是向數十年前より頻る日本に交易致す
度趣よお少へせめて海上通船の砌薪水飲之と節と右の
預度種之工夫仕由の思の得言元か言語文字の通し不し方
より中事し事不し且は省免も無き唯イキリスと唱
へ海賊と而も思召は取合無き右の船國地へ近寄し有無
の沙汰も無き張砲又も大砲ありは打拂はれ凡世界中
如此は取合無き方より何事は蘭人私利の爲に立るイキリス
ハ海賊と而も諛奏仕故と云と奉存の事付度ハ漢文自得仕

者も命一為出出右の執子細に許訖中事とを存
又直に飛出てもは取合も無きは得る漂流人送人を名目
仕由を思召し又前ハ蘭人の傳言仕は執る考は度近き内
江へ近海へ船を寄る物ハ即モリン船との云とは知れ也
打拂も免も度存慮の外無他事極を存し又長崎へ
ふ飛越直に江へ近海へ船を寄る故ハ右申上乾隆の末年貢
船の砌貢物強く外手重くて廣東より陸路運送難事
仍ハ北京近海へ船を寄度恒願して廣東諸附役人を避け直
に中下役人の悪行を愁訴仕事と一般の仕組めて長崎は飛
車ハ蘭人の邪魔并諛奏を避る存意と云考の甲於人曰く

當御代初より蛮國交易ハ和蘭陀而已して他は免れ無き
徳國は政道存申も交易は免れ候も思ふ事あり免れ近付
りては面倒は向打拂は事ハ御定の有らむを成度ハ向打拂ひ
よ有らむと存らむは先方のものを如何心得ありてこの人曰く
西洋諸國よして殊々外人民を愛憐仕り人命救ひゆを何よりの
功德は仕事として既先年デ子マルカと中國とイギリス争戦
の砌イギリス水軍デ子マルカの都デーベンカとヤ所へ押寄せぬ
國都防禦は甚嚴重なりてイギリス人大に敗北仕ゆを節一
軍艦石火矢の爲に大に破損仕既覆波溺死に候はぬ所イキ
リス人急に一謀計を考出船中よしてデ子マルカ人數十人捕置

ぬ向右差出の申は付暫時砲礮見合呉ぬ程にぬ処デ子マ
ルカ王是を承り謀計を思存ゆに一軍艦を殺盡ゆに始終
全くは勝利とやまらむ益々若又生肉一人ありとも自國の者
船中よ有らむハ骨肉を傷ゆ候はお當ぬ向徳と見合石火矢
を放不やぬ内イギリス人軍艦を繕ひ逃去ぬ申おさし申は
右おさし振合も考見ぬは西洋の風俗はたと敵船はぬを
自國の者を内よ有らむハ漫りに放炮不仕事はは度ぬ然も
イギリスも日本へ對し敵國ハ益々謂ハ付合も益々他人
に處今般漂流人を憐み仕候名も徳を送り來ぬ者候
何事も取合ふ申直に打拂ひに候事ハ日本ハ民を不憐不

諸國通商此國の動靜日本に關りし事おしや出は得せ一方に
を大功有るは一方に大害を考は得る今度イギリス人を越え
幸此時節存當時清朝朝鮮魯西亞の外近國は事情は尋
常仰付り彼は度一庶の功を立し事交易を預度存慮十分
は得る定めて的實詳細言上仕へたは坐して當今外國の
真實なる事情を詳しし勞せしは蘇武張騫と得る如
願するは益々國家は是れ大幸な而して彼より願上るは一旦は
僅に越えしは相交易をしし所は至りては國初は是れ規定し如嚴密
に仰付りしは御制禁む旨に仰付り我はおるは仁義は名
成失は彼はおるは又如何に可成極益々恨も憤りは向者万

事穏よお漏の申とに存る文化年中魯西亞使節レサノフ
日本へ飛越して交易を不叶本國へ歸りて申言益々を
歎き自殺し存を下級人ホーシトウ是を恨み憤り只一艘の
船を蝦夷の騷動を生し國は幾多は法物をと懸は度
のモリソンと近し廣東は飛在る上軍艦許多支配仕殊は日本
近海屬島多く魯西亞レサノフの類は無きは非汰し御取
扱有るは後來如何なる患害出来は実よ可恐と存存
猶又此度漂流人と唱はるの舟方蠢愚の者よは但し又佳
成は文才有る者よは不詳何様は度モリソンは飛越し事ハ
尋常の事といふ不存但し右や上は倭方今平明の御代明君賢

相上る海り。御良策詔為在の得を申上り近も無くは度
至愚我傍憚るは其職は非して國家は御政治を論ず
極お少へ其罪不輕事は強く仰を蒙りゆへ申上り事は忠實
尤是を國を思ふの忠膽を出ぬ故に深く御咎詔下向お
はせしるを少ゆる内木柝の夢は驚起夢覚るは事
今もて集會於席と思ひし我寢室より我に對する
人なるは蛇のあけいと暗く鶏の夢遙より夜もをぬけん
と去る有極有り左思右思をるうち又けを醒るは似く又
覺るは何は夢に似く真の夢は何は奇怪不思議の
るはあまの筆をとると覺へし事と記し記ぬ

戊戌冬十月庚日の明日

亥巳

○コノ秋ノ末カ増上寺方丈隱居ヲ願ハレテ願ノ通下命ゼ
ラル後住ハ小石川傳通院順次ナル由ニテ予モコノ僧ハ識人
ニ正相待井シガ何カ故アル旨ニテ三兩日ヲ經テモ其沙汰ナリ
無住ニメ其中御成モ有テ月日歷テモ住職ナク山内ノ口ヲ
聞リニカハル無住ナルハ彼寺始テヨリ未曾有ナリト一日
松屋與清ニ值フコノ人ハ増上寺へ釣合アル者ナレバ右ノイハ
何ト問ヘバ曰フ始メ深川ノ靈岩順次ナレバ此人ナルベキヲ黃圓
貸附ノイヨリ又本堂再建ノイモ有テ順ヲ降リ他ハ讓リタ
レバ因テ今度ノ順ハ傳通院ナルヲ又貴心生メ人ノ旧惡ヲ内
訴セシヨリ還テ已レモ其盪毒ニ罹リ斯若キ混乱ヲ爲

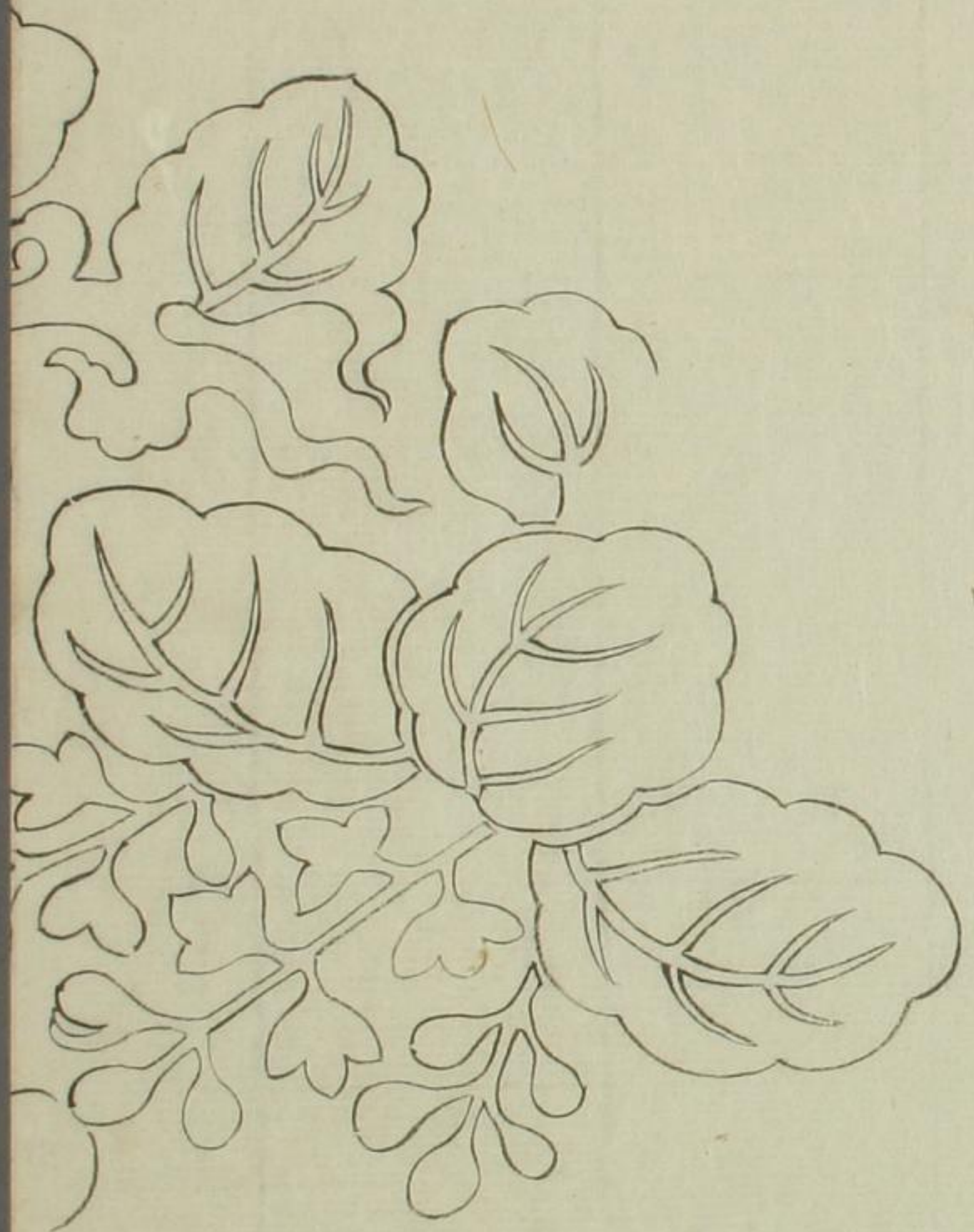
セシト其後又芝山ノ宿坊ニテ聞ケバ知恩院宮復下向有テ
上野ノ如ク宮御持トナリ僧兵ハ凌雲院西山兼帶トヤラ茲
ヲ以テ方丈ノ嗣目延引ニ及フ杯皆濁水ノ池中底魚ヲ知り
釣ルノ沙汰也乎

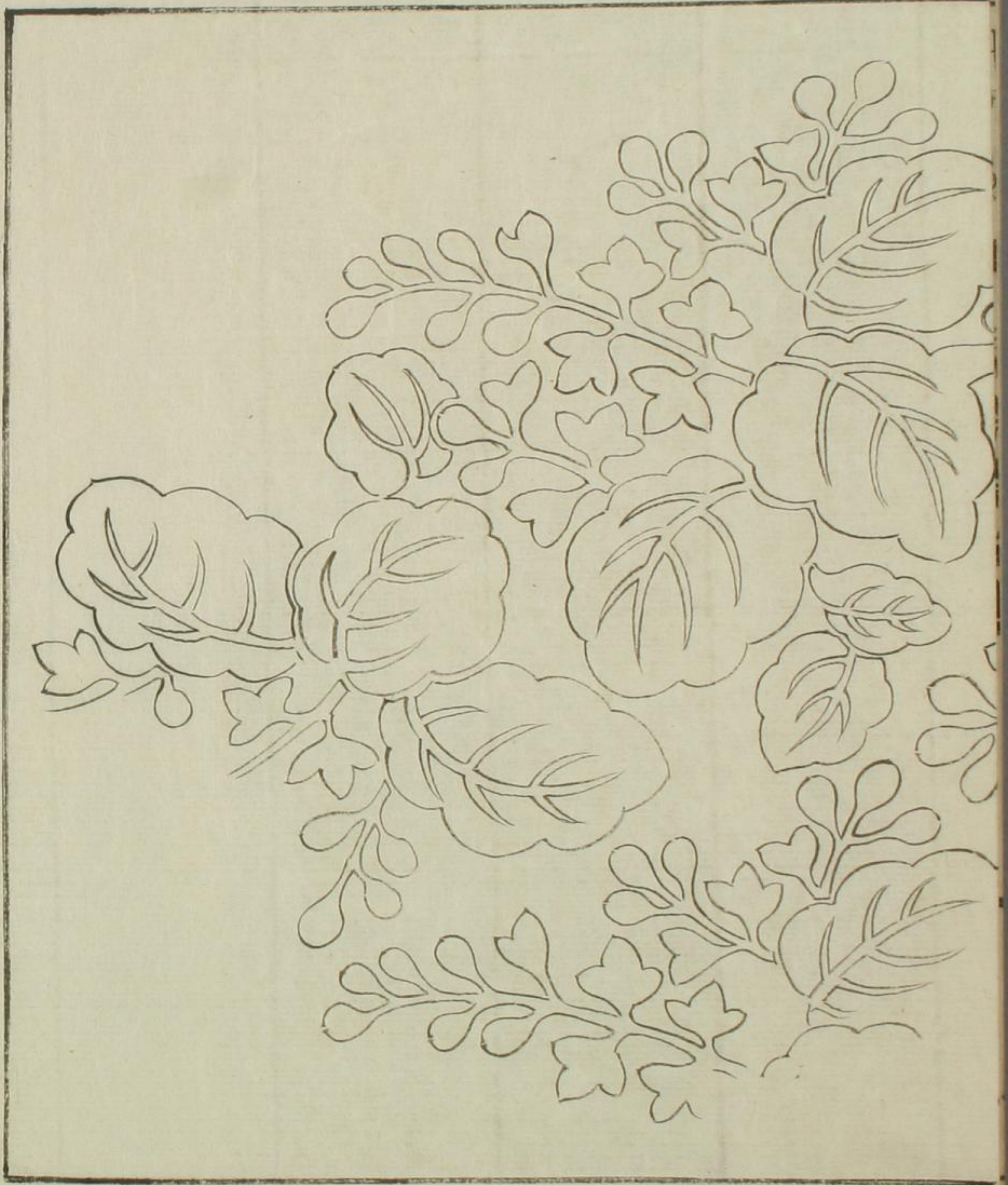
○脇師高安彦太郎モ古キ家ニテ奈良以來ノ旧談モ多
キ中ニ豊臣太閤ノ賜シ陣羽織ヲ年歴タレバ今ハ彼裝束
ノ角帽子ニ爲更テ家藏トス或日携来テ予ニ示ス外包
ニ記メ云秀吉公拜領金襴大内桐角帽子彦太郎曰大内
桐トハ嘗テ防州ノ大内氏全盛ノ年貯置シ漢渡ノ物ナリシ
ヲ後太閤獲テ陣羽織ト爲ラレシト又此物大御所公御当

世ノ年上ラメテ御覽有リシト又彼家ノ神祖ヨリ惠賜ノ能ノ狩
衣アリ紺地金紋ニ巴ヲツク因テ彦太郎ガ家紋今ハ巴ヲ用テ

大内桐金襴ノ略圖

紺地
金紋





○放鷹ハ武門ノ一事ナレド予ハ若羊ノ中試シマニテ一向
不案内ナレバ羞入レリサレモ聞シイハ捨ガタクテ記憶セリ
此度右大将様御鷹野有テ孫モ御供セシニ御奉モ有テ
後彼是ノ御鷹話ヲセシヲ茲ニ書シルス是ハ此度ノ御場ニ
限ラズト知レ雁ハ群中ニ御鷹ヲカクレバ他ハ皆飛去レモ一羽
御鷹ニ捺^{オカ}ラルレバ飛去シ者却飛メ御鷹ヲ搏ツ因テ搏^{オカ}ル
バ御鷹獲物ヲハナスユエ却飛ト見レバ御鷹匠馳寄テ御
鷹ヲ援^{ツク}カレバ雁復飛去テ御獲物トナル他禽ハ此ノ無^カシ鷺
ハ慧^{カシ}キ者ニテ御鷹迅飛メ向ヘバ其^チ中首ヲ屈ルユエ御鷹羽^{トビ}
過^アテ獲ラズサナキ者ハ獲ラル五位鷺ハ晝ハ眼明カナラ

三
世
氏
三
氏
書

ナルカ飛ブイ遅クメ逆擲ル予云。コノ禽ノ此角ハ長大鋒ノ如シ
何々然ルヤ。答フコレ眼暗キガウハ凶貌性愚ナル者カ。鳥ハ羽
合ヒ捷クメ。御鷹ハムズカシキ者ナリト。又^{亥巳}晚冬ノ五日。早味石翁
ヲ訪テ逢タレバ。霜朝苦勞抔云ヨリ鷹ノ話ニ及タルニ。此項ノ
御鷹ハ何ノ鳥ナルヤト聞ケバ。此項ハ鶴ノ御成ニテ。御獲物ハ
禁廷ヘノ御進献ナレバ。御場ニ御獲物ナケレバ。幾度モ御成
アリ。御鷹モ^{シキヨ}四居ニメ。是非^レ獲ラル^レトゾ。是モ御^{コト}拳ナラ
サレバ。御進献ニ成ラズ。因テ必ズ御拳ナリ。其御鷹ハ黄鷹
ナルガ。四居ノ中。二居ニメ。二鶴ヲ得ル^レトモ有リ。四居ニメ。三鶴ヲ
得ル^レトモ有リ。四居皆空擲ナルモ有リト。二鶴ナレバ。今上仙洞ヘ

御進献三ツナレバ。此餘一ハ大御所公へ上ラレ。四ノ井ハ。公方様御
自身ノ御披アリト。右ノ御場ヘハ。必ズ御小納戸頭取御鳥見ヲ
従ヘ御場禽袖ノ様子ヲ窺見テ言上シ。御場定ル。大抵二場ニ
御獲物有リ。御鷹場ハ十一處有レド。鳥ノ寄^{ヨリ}著方ニテ御成
ナシ。其タメニ。前ヒ口右ノ面^{シマ}役下見分ヲ爲^{ナシ}テ。禽ノ居著ヲ觀テ。
其處ニ御成有ルトコレ等。彼翁ガ以前自歷ノ話ナリ。石翁又
語ルハ。聞クニコノ御進献ノ鳥。上方ニテモ殊ニ御賞歡アリテ。一
度ナラス。御^{ナニ}貯ニテ何カ供^{オシ}御^{ナリ}ニ用ヒラルト。

○品川ノ東海寺ニ澤菴^{クワン}番^{アン}ト謂フイ有リ。或人云ケルハ。某
一^{アルトシ}羊ノ春夜御殿山ノ夜櫻ヲ觀ニ。逆往タルニ。櫻ノ枝ニ處々

挑灯ヲ結ツケ有リ。某思フニ。花ヲ賞スル人ノ所爲ナリト。其アタリノ者ニ問ヘバ。曰フ。澤菴番ノ者ナリト。是ハ此山辺ニハ。處々通路ノ徑アレバ。猷庵ノ御時。澤菴和尚ヤ。モスバ。彼寺ヲ遁脱メ逃去ヲ。制止セヨト令アリシガ。遂ニ猷庵薨逝ノ後モ。亦澤菴遺寂メヨリモ。公ノ遺命ナケレバ。至今テ尚斯ノ如シト。予モ或日東海寺ヲ過シ。寺内ユキヌケノ所ニ番舎在リ。番人居シユエ。何ノ勤番ナルヤト問ヘバ。澤菴様ノ御通りナサルヲ停ルナリト言キ。是等ハ。彼寺ツキノ農夫カ面番スル也。何レモユカシキ甘棠ノ比也。

前話前事ニ就テ。後考ミレバ。澤菴ノ寂ハ正保二年ナリ。然ル者乎。

凡中ハ。猷庵ノ薨ル慶安四年ニ前ダツ。七年サレバ澤菴没ス。七年ノ間。猷庵ナド澤菴ノ爲ニ禁令ヲ弛ベ給ハサル疑フベシ。若クハ其頃ニ故有シカ。因テ猷庵ノ逝後モ。斯ク今ニ連綿タル者乎。

予嘗テ東海寺ニ往シ。中澤菴ノ墓處ヲ視ルニ。徒一圓石ヲ轉置メ。一切墓表ノ如キモノ無シ。還テ其下辺ニハ。石磴石垣ナドアリ。察スルニ後人ノ造リシ者ナラン。聞クニ。一圓石ハ澤菴ノ遺命ナリト。又世ニ謂フ。香ノ物ヲ漬ル桶上ニ在ル圓石ヲ墓ニ似タレバ。因テ人澤菴漬ト呼フ。何ニモ然ル当キカ。廣徳寺ノ僧ニ聞ケバ。澤菴漬トハ。貯漬ノ訛ナリト。是ハ全ク彼徒

澤菴名
宗彭

澤菴ヲ顯負^{ヒキ}仆^{ツク}セシ者ニメ澤菴漬^シコソ其遺徳ノ芳シケレ
高僧傳云仲冬老病台府賜^テ医^ヲ日問^ハ劇^ク安臘月十一日衆頻
乞^フ偈^ヲ彭書^シ夢字^ヲ拋^テ毫^ヲ坐^シ化^ス世齡七十三法臘五十七豫誠徒
曰全身打疊可掩^ヒ土^ヲ去^ル當^ニ齋^ヲ立^テ牌^ヲ安^ク像^ヲ掛^ケ眞^ニ年譜誌^シ狀^ヲ一切
禁^ル之^ル門人^ノ遵^ヒ命^ヲ收^メ守^ル之^ル西北^ニ焉

○嚮ニ經營日成録兩冊ヲ輯シ事盈タリト成編セシガ復此
冬御賀惠ノイヲ聞テ再ビ記聚ス

十一月廿五日

御刀 光世 代金七拾五枚 伊使根坂中務大輔
御服差 備中心次若 代金五拾枚 紀伊大納言殿
二種一考

御刀 佑若園若房 代金七拾五枚 同同人
御服差 日政光 代金五拾枚 尾張中納言殿
二種一考

御刀 佑若園義景 代金七拾五枚 同土井大炊頭
御服差 佑中園次若 代金三拾五枚 水戸中納言殿
二種一考

右西丸御書後所出^ル本^ノ今^ノ新^ノ本^ニ出^ル
十一月廿八日

時帳三十
井伊掃部頭

序意同
西丸御書後所出^ル本^ノ今^ノ新^ノ本^ニ出^ル

西丸沙普法并上納金佐也

松平和泉守

各代大田備後守

水野致恭守

太田備後守

服坂中務大輔

松平恒春守

土井大炊頭

堀田備中守

右左衛門 河若津領

少三郎為二組

同新并上納金佐也

堀山河内守

堀大和守

小笠原忠輝守

林肥後守

大岡之權正

本多豊後守

堀田攝津守

西丸沙普法并上納金佐也

松平玄蕃守

時服十

西元少無後符上納金注

伊刀

受農正房
代金十枚

水野幸岐

同制

山例

水野受農

牧野輝豫

土崎輝實

池田加賀

松平義輝

水野名見

大之條隆河

西元山例

御印切也一組

堀田輝實

忌 同部因幡

右田中孫

越川輝實

右大將輝實例

世田出雲

新見輝實

松平祖馬

小田切土佐

右於真流似一平白 所付見

御使大津修理大夫

浪沙石枚
時服十
二種一病

日光准后

同同人

浪石枚
時服五
一種一病

同 新宮

右西丸沙表向沙地法沙安徳相所公府永吉

十二月六日

一今已后御書院 出所

西丸沙普法傳上ヶ金仕公

御刀 紀伊重國
代令十六枚

松平三河守

時服二十

御刀 肥前國忠廣
代令同枚

松平廣政守

同十六

同同枚

松平大和守

同二十

同 義曆公重吉
代令二十枚

細川致中守

同五十

西丸沙能向大奥向以普法所用仕公

時服十六

酒井左衛門尉

同

小笠原大膳大夫

同

松平致中守

西九以善後三令台位

御刀

代令十六枚

松平輝定

同

豐後國行長

本多中兵衛

同

同定

水野出羽守

同

同重

松平甲斐守

同

同豐政

阿部伊勢守

同

同輝

阿部能登守

同

同流

九鬼長門守

同

同輝

建部内通

同

代令同

永井信濃守

同

豐後國無形

戸田淡路守

同新

稻葉丹後守

牧野備前守

喜山周膳守

松平輝定

西九洲度不夫奥向以善治以用和信

板倉周防守

大久保出雲守

堀田豊前守

時服十

新庄之教以

西元心善後付父肥前守上令合信

永井山城守

所三所物一組

同新善文隆之助上令合信

松前準次郎

御刀 肥前國守次
代合十三枚

右半白 八所

松平大隅守

御刀 肥前國守次
代合三十枚

名代南初輝守

時服 五十

西元心善後付上令合信用達上令合信上

松平肥後守

時服 三十

名代九鬼式初大補

同十六

酒井雅樂次

名代酒井右亮

同

松平下總守

名代長津監物

西元心善後付大奥向心善後用初守上

松平德政守

御刀 肥前國守次
代合十六枚

名代松平若松守

時服 十六

西元心善後付上令合信用達上令合信上

間部中孫守

所三所物一組

名代弓初内親守

同

井上河内守

名代井上意江守

同制 守 守

右投御書院後掃部次老中別在平勢大輔中後

御刀

豐後出重形
代合十文板

松平土佐守

時服 三十

名代松平對馬守

同

同定形
代合同形

松平出羽守

同

名代松平大和守

同制 守 守

時服 三十

藤堂和泉守

名代藤堂依後守

同十

久世大和守

名代久世大學

同

内海紀伊守

名代内海因幡守

同

安海對馬守

名代安海伊豫守

同

戸田因幡守

同

土岐山城守

名代土岐榮上守

同

鳥居丹波守

名代鳥居山城守

西丸心丸向大異向心丸用法用抄部公行上中

所刀

豐後守守形
代令十五枚

大久保仙丸

名代美田豊後守

同

肥前守正象
代令同以

松平之教政

名代系極首通抄監

同

豊後守喜命
代令十六枚

秋元但馬守

名代牧野誠守

同

相模守形次
代令十三枚

内卷豊後守

名代内卷金之丞

同

豊後守統行
代令同以

加納土佐守

名代加納大和守

同

肥前守忠若
代令同以

酒井大和守

名代松平丹波守

同

豊後守兼言
代令同以

朱倉丹後守

名代堀山重守

同

同兼言
代令同以

北條土佐守

名代秋月信守

同

肥前守正廣
代令同以

大園能守

名代稻垣总持守

同

豊後守統行
代令同以

有馬滿丸

名代稻葉之助少輔

同 因定形
代金銀

雲川紀輝書

名代古河編三郎

西丸山書院書上及在河用達于在殿書上中

右於河川書院綴類列是回前回人中後

御刀 了戒
代金辛枚 上使堀大和書

御服 袖系園忠長
代金三十枚 松平如賀書

一種一物

右西丸山書院綴類出是身及書

十二月七日

御刀 芳園園第欠
代金二十五枚 河原左馬 水野敏若書

右西丸山書院綴類出是身及書

時服七 林胆後書

右同綴類用和書上及書 河原左馬書

河原左

水野受濃書

同六 西丸山例亦 白次甲斐書

平園對馬書

右同綴類用和書上及書 河原左馬書

十二月八日問老達旨

大目付

西丸山書院綴類出是身及書十六日石以上

之面、在万石以下、為所統、依壓、中、自、中、務、忌、用、
所、中、丸、に、登、城、来、より、西、丸、に、下、り、出、仕、也、

但、病、字、幼、か、徳、居、く、面、く、も、月、着、く、老、中、伯、耆、也、
佐、中、守、宅、に、使、者、一、人、致、し、且、又、在、國、在、色、く、面、く、も、
掃、初、の、老、中、伯、耆、也、使、中、守、宅、に、死、礼、一、人、致、し、也、

右、通、一、つ、ら、松、觸、也、 十二月

大同、廿、也、

西、丸、所、表、向、所、善、後、所、善、出、其、身、 大、所、訓、極、所、積、極、也、
在、所、礼、事、亦、万、石、以下、之、交、替、寄、合、之、也、 西、丸、に、出、仕、也、
其、廿、六、日、不、若、く、色、一、つ、ら、出、仕、也、

右、通、一、つ、ら、松、觸、也、

十二月十二日、表坊主組頭廻状、諸家留守居當、

其、廿、六、日、所、本、丸、西、丸、に、出、仕、也、其、廿、六、日、伯、耆、也、
西、丸、所、表、向、所、善、後、所、善、出、其、身、 大、所、訓、極、所、積、極、也、
在、所、礼、事、亦、万、石、以下、之、交、替、寄、合、之、也、 西、丸、に、出、仕、也、
其、廿、六、日、不、若、く、色、一、つ、ら、出、仕、也、

○加藤清正ハ石垣ノ上手ニテ、或人ノ云ケルハ、其肥後ニ往シ、并、

隈本城ノ石垣ヲ見タリニ、高ケレ、凡コ、バ井邊ニメ、陟ルベク見テ、
一、カケ上ルニ、四五間ハ、陟ラレ、ガ、石垣ノ上、人頭上ニ覆カ、リテ、

空見へズ。夫工正其マ、カケ下リシトゾ。又此項或人ノ語ルハ、大城
西丸大手御橋内御曲輪ノ石垣モ、清正ノ築シナリ。其工正ハ御
城御取建ノ井、清正ハ石垣ノ上手ナリ。迎台命有テ、清正自身、
指圖ニテ築シ所トゾ。因テ今モ、北ハ西丸大手ノ隅ヨリ、西ハ三
角矢來マデヲ、清正石垣、又ハ加藤土居ト呼ブ。又コノ云云ハ、白
石隨筆、岩淵夜話拾遺ニモ出スト。予類焼後、坐右ノ書焚
亡メ引用スルイ能ハズ。

亥巳
○怪カハ語ラズトカヤ。三洲前、短橋ハ以前ノ御由緒工正カ。今ニ
官ノ御普請ナリ。コノ度又懸カケカハ更有テ、過半成シ。井、岡崎ノ家臣
某、右ノ仮橋ヲ、夜分ニ僕一人ニ挑燈ヲ持タセ渡リ行シガ士ノ

背ヨリ、両手ト覺シク肩サキニ抱イタキツキタリ。士賊ナリト爲カシ。究
テ其手ヲ引、負サ、ニ前へ投出シ視タルニ、全身ニ毛生テ人ノ如ク
ナレド、獸類ニ怪異ナリ。因テ領主ニ達シタレバ、迺其物ヲ江都ニ
送ラレタリ。夫ヨリ内々官呈ニ及ンデ、其下流ハ市辺ニ於テ所謂
觀物ニ出ント風説セシガ、今ニ其イヲ聞カザレバ、或亦虚談カ。又
聞ク、斯状ノ如キ怪獸、外ニモ其物ヲ獲シ話有リシサレバ、空シク
モ爲シガタシ。

○水戸黄門当公齊 昭卿ヨリ召有テ赴タルニ、彼是ノ雅談セラル、
中、仰給フハ、世ニベキモノ皮ノダン袋ト謂フイハ、古人ハ馬皮ヲ
以テ袋ヲ造リ、コノ内ニ諸物ヲ納レタルナリ。因テ人ニ對ス、

敝馬ノ皮ノ團囊ト言シイナリト珍シキ御言ヲ聞シ也
又其日ハ同客与三人ナリシガ幸ト知巳ノ人々ニテ切瑳ノ
語セシ中兩客ノ話ヲ傍ヨリ聞クニ頃日参政某侯ノ愛
妾何カ仔細有テ其部舎ノ婢ヨリ小刀ヲ以テ突害サレシト
其故ハコノ妾竈溢ノアリ参政支配ノ諸氏ヨリ苞苴ヲ
受シ杯ソレ耳ナラズ牝雞ノ所以數ク有テ彼家ノ諸臣伏
セザリシガ實ハ誰人カ主君ノ爲ニ刺客ヲ含シト又コノ婦カ
ノ妾ノ下女ト云ニモ非ズ彼参政ノ臣ガ女所謂ル部舎子ト謂
者ニテ竈妾ナレバ從置シガ然ルイニ及シ杯又其殺害ノ後カ
ノ女ノ認シ書置ノ文ニ尋バカリナルモ有リシ杯

當日退散ノ片厚ク恩惠ヲ謝シ去シガ明日モ亦使臣ヲ遣
ハメ前事ヲ謝シ申セシニ多年懇スル同朋トウホウ運阿ウネアガ使臣ニ
語りシ旨ヲ左ニ録ス

又其日公ニ謁見セシ後復三人与小室ニ召サレテ側ラ近ク
進ミタルニ公迺曰ク静山汝ガ頭髮實ニ偉相トス賞スベシト
有リシガ明日同朋ガ言ニハ昨静山ガ貌法躰ニアラス又俗容
ニアラス奇トス大ニ好シ又曰ク渠ガ面胸ヲ觀察スルニ何カ物
有ル者也聞シニ違ハズ武德備ル漢也昔朝鮮ノ役彼祖法印
カ事ヲ聞ク今渠ヲ見ルニ其子孫ト云テ取ザルベシト予聞テ
歎息夢ノ未ダ覺ガルガ若シ因テ其真ヲ子孫ニ貽ス

コノ日ハ公喜歡坐くて各退帰ハ夜闌ニ及ベリ又御真ニヤ
三人ノ肖ヲ畫ガセ給ハン迎畫臣ナル右膳ト云者ヲワザト
召出サレ自ラ燭ヲ剪給ヒツ、描クヲ傍觀有リ侍臣モ亦
相列テ共ニ觀ル偏ニ昭君ガ胡王ニ下サルノサレ也一人ハ信
州ノ當侯一人ハ野州ノ老侯予ト俱ニ皆写真ヲ成シ公其
評論有テ笑語相交ル子孫ト雖也斯ノ若キハ未ダ有
ラザルノ榮歟

又憶ヒ出シタレバ其夜ノ御物語ノ中ニ申スハ今日持セタル挾箱
ハ高祖肥前守鎮ガ勤行セシ中從ヘシ挾箱拙寺ニ納メ有リ
某摸制メ貴邸ナドニ忝上スルニハ供ニ從ヘヌト云タレバ取寄
視給ハン迎御前へ取出シ丁寧ニ自ラ打返しく視給ヒツ、畫

臣仰子祖圖ヲ減付松家入留ラレバ天祥公御名水府
臣家ニ祖圖ヲ減付松家入留ラレバ天祥公御名水府
喜思又



○前ニ經營録ノ残輯ヲ成シ仲冬廿五日ヲ始トシ廿八日赤冬
六日七日八日ノ事ヲ終トセシガ復十九日ノ遺惠ヲ聞ク其
十二月十九日

銀十枚

栗原六右衛門

大所臺様御度書

平右衛門 樂成堂藏書

西丸大奥向沙普後掛り出精お寄り申上り

伊豆屋様沙普後掛り

和野田次重

同形

西郷岩龍

山中清左衛門

大奥向沙普後掛り出精お寄り申上り

右丸沙普後掛り出精お寄り申上り

大所屋様沙普後掛り

中村徳太郎

同形

平野半次郎

西丸大奥向沙普後掛り出精お寄り申上り

伊豆屋様沙普後掛り

尾村忠三郎

同形

赤川小源吉

三井理三郎

大奥向沙普後掛り出精お寄り申上り

右丸沙普後掛り出精お寄り申上り

十二月廿六日

金七枚

時限四

同
同
三

伊豆屋様

内巻隼人正

伊豆屋様

土岐丹波守

所部定吟味方及後垂

琴木欽助

浪手拾枚中

支記每々

星野一節斎

千田玄藏

小倉源之進

同部有之

右於所左部全縁類款若中海之侍社同前

所部幸中在行

馬場恭之助

金二枚中
時服二

高岩之木

仰目見特拾

心作幸方極取

松崎清十郎

銀拾五枚

同部有之

右於所躰之間若年若中出在松平玄著以中海之

二條四段絶在行

岡本良右衛門

銀拾枚
時服二

所部幸組以

塚誠春助

銀拾枚

戸田嘉十郎

西九所表向所善信所繪所用古部外有之

右於所席款若中海之林肥後守侍在

金印枚

狩野祐晴

西九所表向所善信所繪所用古部外有之

右於所左部全縁類同中海之若年若中侍在

○去年ノ秋イニテ。大御所公俄ニ御不例ト聞タレバ。何カヤト
 蔭ナガラ心配セシニ。隱者為ベキトモ無ク。茲ヨ彼翁ノ手寄
 ト。文通セシガ。猶モ心元ナク。彼莊ノ近所ナル。菫花ガ宅ニ往テ。
 云云セシヲ。子孫ノ為トテ赤心ノ状ヲ貽ス。世人ハ。何ニ斯翁
 ニ阿腹シ。己ガ出身ヲ。ニ禱リ。苞直ヲ携テ。吾ガ栄達ヲ求ル
 ハ。君子ノ道トヤ云ハニ。聖賢ヲ学トヤ云ハニ。彼翁カ文通。

御直披書状

中野右翁

上畧 然レテ。御細々ト。所書。極心。在ル。西丸様。世
 呂々。所不例。御心。何々。心。業。事。之。是。為。作。上。之。後
 所。御。心。在。ル。世。節。中。最。早。御。心。業。事。之。是。為。作。上。之。後

所。御。心。在。ル。世。節。中。最。早。御。心。業。事。之。是。為。作。上。之。後
 所。御。心。在。ル。世。節。中。最。早。御。心。業。事。之。是。為。作。上。之。後
 所。御。心。在。ル。世。節。中。最。早。御。心。業。事。之。是。為。作。上。之。後

上畧 然レテ。御細々ト。所書。極心。在ル。西丸様。世
 呂々。所不例。御心。何々。心。業。事。之。是。為。作。上。之。後

所。御。心。在。ル。世。節。中。最。早。御。心。業。事。之。是。為。作。上。之。後
 所。御。心。在。ル。世。節。中。最。早。御。心。業。事。之。是。為。作。上。之。後
 所。御。心。在。ル。世。節。中。最。早。御。心。業。事。之。是。為。作。上。之。後

ならずるを平作方へお付し御出者し御横陣の御出もとせ
 知し思ふことあるを早朝の御出所自通ななりと
 彼を御出者もつらあるに御出世後心御出なりと
 心安んじ御出者ななり滅心思悦難を御出ななり又
 委補を御出者ななり下畧 九月廿八日 尚矣

是ニ就テ過ニシノ憶浮タルバ茲ニ述ヌ嘗林内記ト屢ク交
 語セシ折カラ林我ハ幕府ノ臣ナリト云ニ工予云吾ハ然ラズ林
 云サラハ何ン予曰朝ノ臣ナリト云ヨリ互ニ彼是ト爭ヒ言シカ
 予竟ニ曰フ我何大事有リモ幕府へ御敵對スルイ毛頭有
 ベカラスサレモ萬一官朝ト敵シ給フイ有ラバ官へモ對シ奉ル

ベシ然レモ幕府自ラ御出有ラバ於予ハ跪伏弓ヲ偃矢ヲ
 関ルイ無ケシ是 神祖ヨリ代々衣食住ノ三厚恩ニ報ヒ
 奉ル故也此時若君幕臣ト云ナレバ此時君ト對セバ忽水魚ノ
 友交ヲ捨テ幡然弓矢ニ及バン如カジ夫ニ工微カヲ竭メモ相共
 ニ官ヲ善道ニ進メ恭ラセ永ク國家長久ヲ保チ奉ラシイラ
 御奉公ト爲ベシ杯云爭テ正語メ伏セサリシ
 又憶ヒ出スハ先年飛鳥井雅光卿日光御神忌ニテ其御祭ノ
 列人ニ下向次テニ東府へモ出ラレ彼家ノ蹴鞠御覽有リ予モ
 鞠道ニテハ師家ノイナレバ對晤モ爲タク思タレド官制卿ノ病
 所へハ往ガタク京歸ノ片品川ノ旅次ニ追送り驛舎ニ於テ面

會ス此并初見ナレド父雅威卿以來ノ故事ヲ話合ヒテ旧
 交ノ如ク覺ヘシ其并ノ語中ニ蹴鞠ニ因テ登城モ西度セシ
 ガ城内モ廣キ一ニ見ウケヌ又陪臣衆モ饒シキ一ニ覺ユ
 杯申サレシ予思フナルホド并伊本多神原其外ノ歴々
 實ニ卿ノ眼ヨリ見テハ陪臣ニ違ナシサレモ大城ヲ城内
 ト云ハレシ一ハ我等ガ朝臣ノ身分ニ取テモ賴奉ル將軍様
 へ對シ不禮ナリト胸惡ク思并シニ卿又問ハルハ其住處
 ハ何レト云ハルユエ某ハ聞及給フ隅田川ノ近キ辺ナリト
 答タレバ卿サテハ聞及シ名所定メシ都鳥モ見タハント
 有タレバ我返報ハ茲ナラント都鳥テフ一ハ久シク聞及タレ

ト関東へ從フ武夫等ハ其辨別ナド定カナラズ唯弓槍ノ
 汰ノ三專ニ候卿ニハ和歌ノ御家還テ卿へツ問奉ラセシ
 伸タレバ卿モ流石ニヤ思ハレケン默笑メ并ラレシ林内史ガ幕
 臣ト云シト言争ヘモ又京紳ニ對メハ將軍様へ聊ノ御取シモ
 掛奉ル一ツ為ヌコソ男ナレ聞者何ン

又憶フ是モ先年ノ一ニテ阿部閣老備中守福山城主ハ未ダ部屋
 住ニテ主計頭ト云シ并松平彈正忠大喜田城主モ閣老巨州ノ

本宗此餘御譜代ノ輩別懇ノ人々ト膠漆ノ會ヲ爲テ時々
 言論セシ并予言ケルハ公等ハ御譜代神君御幼年ノ時
 ヨリ附添ヒ奉ラレシノ後云ニモ及バズ某等ハ將軍武関ノ

先々ヨリ。隨從セシ武夫ノ家ナレド。公等ハ萬一。故有テ御旗
ニ向テ進ムル。凡。拙夫ニ於テハ。外様ノ中一人。御旗ヲ背^{ウシロ}ニメ
公等ト對セント云タレバ。座中ノ人々。容ヲ改メ。廣言ヲ吐
タル哉。連。乾笑メ。井タリシ。予ガ胸中ハ。今尚他無シ。

○正月八日ニ寶生大夫が能初ヲ見物セシ中。棧舖ノ話ノ
 耳底ニ留リシイヲ書ツク。過シ。大御所公俄ニ御不例ナリ
 シ中。御藥モサレテ調進有シガ。御相應ナカリシ中。不圖
 仙洞ヨリ賜リシ御文ヲ思召出サレ。京へ御申上有タレバ。早ク
 モ御調下有テ。京武ノ往返三日餘トカニ到着シ。御服シ
 有レバ。御相應ニテ。夫ヨリ追々御順快ナリシト。右ハ。仙洞モ
 近頃。大御所ト同シ御症ナリシガ。其藥ヲ御服アリテ治シ
 給ヒシヲ兼テ。宸翰ニテ仰下サレシユエトゾ。雲上ノイナレド。
 下界ノ慶聞也計縷。

○浅草寺ノ外門世ニ雷門ト云フ前。並木町ト云ノ左側ニ酒肆在リ。亭主

ヨ山屋半三郎ト称ス。山屋トハ酒店ノ呼號ナリ。世ノ所知。店前
大ナル板牌ヲ樹ツ。隅田川諸白ト。白字ニ標識ス。傍ニ亦山屋
半三郎トシルス。世皆所視ナリ。コノ山屋ハ。聞クニ正シク松浦黨
ノ末ナリ。何ニメ知タレバ。先年寺内ナル三社。權現ノ大祭禮有リ
シ中。予並木町ヲ通行セシニ。彼家ニ張ル幕ニ。三星ト楮葉
ノ紋ヲ出ス。予訝ク。若クハ同姓衆ノ。彼家ヲ借見物ナドスルヤ
ト。竊ニコレシ質ニ。他ニハ非ズ。某ガ家紋ナリト。答フ。因テ姑
ク不審暗ガル中。又途間ニテ。羽織ニ楮葉ノ紋アルヲ服セシ
者ヲ見ル。予又思フ。コレ今福氏松浦伊勢守ノ出入ニテ。与ヘシ物
カト。然ルニ。或日梅塢ニコレシ話スニ。塢答フ。コレハ全ク山屋ノ亭

主ナリ。此者頗ル文才アツテ。塢ガ門ニ学ブ人ナリ。正シク松浦黨ノ
裔ト云。予モ亦祭禮ノ後。手寄ヲ以テ問ハセタルニ。某ハ松浦黨
ノ末ニ。浅草寺カク草創ノ時ヨリ。此辺ニ住ス。先年ハ家傳ノ系譜
モ有タルガ。火災ニ遭テ。今ハ罔シ。予因テ考ルニ。浅草寺ハ慈覚
大師釋圓ノ草業ト云ヒ。慈覚ノ寂スル貞觀六年ト聞ケ。此時
未ダ吾ガ始祖左府公源融存在ナリ。奚ゾ松浦黨有ルベキ可笑
シ。渠ガ家傳。後世ヨリメ云セ。サレバ何ニメ松黨ナリヤト云ハ。天祥公
ノ時。民間ヨリ採揚ゲ。士ト爲ラレシ。相知氏松浦ノ一黨ノ所傳。足利尊氏ノ
文書中ニ。相知ノ先治部左衛門尉秀ト云シガ。尊氏ノ東國下向ニ隨
從メ。武州竈手指原。分陪川原等ノ合戰ニ軍功アツテ。遂ニ其地ニ討

平戸藩 樂城堂藏書

死ス尊氏因テ其軍忠ヲ賞シ其子名今志ル某ニ武州八田ノ庄云云當
 行ス其文書今尚相知ガ家ニ傳フ又頃日或人ニ聞ケバ八田ノ名武州ニ
 有リト今何レノ處ナルヲ知ラザレド山屋ノ久シク淺草ノ里ニ住スルイ全ク
 コ八田ニ住セシ相知秀ガ子孫ナルベシ然ラズンバ西邊ノ松黨奚ゾ
 遙ニ東地ニ在ルベキ是等山屋ガ家傳トメ可也梅塢云フ半三郎
 姓源名清父ハ徳三郎名熙サスガ松浦黨ノ末ナリ又渡邊ヲ苗
 字トスト是等ハ後世家傳ノ正ヲ知ルイ無クメ思フニ家紋ノ三星
 ヲ見テ渡邊ト名乗シナラン西氏ハ嵯峨源氏ナレド渡邊黨ハ
 東地松浦黨ハ西州也山屋ハ西裔松浦ト云ハズメ何ゾ東稱メ渡
 邊ト名乗ランコレ楮葉ノ家紋トスル故也松浦黨ノ三星楮葉ノ家紋
トスルイハ今福氏ノ系譜ニ所

載三星ハ皇統ナレバ天子御旗ノ文ヲ用ヒテ三星ノ象ナリ楮葉ハ吾黨ノ初祖久公
西國ハ下向ノ井始テ肥前加治谷ノ地へ着岸有テヨリ家族蕃昌セシカレ楮ヲ祝家紋
トナスト因テ嵯峨ノ源氏ニハ渡柳兩黨ハ通メ三星ヲ用ユレド楮葉ニ於テハ渡氏ハ
用ヒズ松氏ハ三コレ紋トス然ルラ今山屋知ラス因カク失ヲ爲ス故ニシルス

○或人云フ今狸友ト綿名スル者アリ自ラ白面舎ト号ス斯人咄ヲ以
 テ業トシ所謂咄家ナリ又狸友ト呼フユエハ咄間ニ其衣ノ胸ヲ
 披キ腹ヲ露ハスニ便便トメ張り殆ンド其膝ヲ覆フ帝ニ臨ムバ其
 妻三線ヲ弄ス狸友迺其音節ニ合セテ口小鼓ノ聲ヲ爲シ腹ヲ撃
 バ其音大鼓ノ如ク最似タリ人以絶妙トスコノ人江都ノ産ニメモト卑
 賤ナルガ咄ヲ作ニ及ンデハ頗學オノ語ヲ爲ス是ヨリ退テ九州ニ住スト
 予問フ此藝ヲ持シ且生國ヲ去ル何シ人答フ全ク食ニ飽キ居ヲ安シ
 スルノ計ナリト予迺黙ス

○行智過シ頃ヨリ中症ヲ患ヘ半身不隨ニテ把筆モ能セズ左
手ヲ以テ字ヲ作ス又其ニ子富丸トカ云シガ成長メ武州郊外ノ寺ニ
嗣法セシヲ智モ業用ノリニ依テ赴ケル并彼地ノ大略ヲ書贈リシ
ヲ渠ガ芳意ヲ好メ茲ニ移記ス

於金子封上

入間郡金子郷地方見聞は在粗書記奉進覽作

一江戸ノ西四ツ谷中野萩久保関村無^上六里柳澤一里前田一里

久米川一里

コレ太平記ニ見エタル古戦ノ地久米川ナリ河幅水多キ時八十四五間モ
候ベシ折フシ水涸テ漸ク二三間カホト必々水流アリ小石多ク山川ノ躰ニ見ユ

上新井二里林一里金子寺竹村二里

一金子ノ卯辰ニ當リ寺竹村ノ房ヨリ二里餘行此處小手指ナリ

小手指原ニ岡山アリコレ狭山ナリ狭山カ池ハ水涸テ今ハ無シ古

歌多ク詠ルハ此所ナリ小手指原ニ古社アリ土人ハ北野天神ト云

コレ延喜式ナル物部天神社ナリ神主栗原氏學者ニテ候ヒシ

一金子十郎行家主ノ事ハ保元平治記盛衰記等ニ見ユ自坊傳

フル所ハ昔桓武天皇後胤八代ニ左近衛中将武藏守平行長ト

云人アリ任國ノ間子アリ當所ニ住ス依テ金子ヲ以テ稱号トス

十郎家忠主モ此ニ出ト云リ即テ自坊祖先トス後ニ金子越中守
家定ト云人アリ上

形謙信ニ屬ス即チ
當門ノ人ナリ當家中葉ヨリ修驗ニ入ル即舊例ニ依テ供田十石

御朱印ヲ下シ給ヘリ。

一平行長卿。勤学ノ妨ナリトテ。響虫ノ聲ヲ嫌ハレシトテ。金子郷中。夕エテ響虫鳴カズ。他所ニテ。聲高ク鳴クヲ取来テ放セドモ。金子ノ地へ来レバ。スベテ鳴コトナシ。昔ヨリ金子七不思議ト云テ傳ヘ云リ。

一七不思議ト云ハ。土民ニ傳フル所。信ズベカラズト云ドモ。奇事モ亦一ジハレバ。土人ノ云ガマニ書ス。

○響虫不鳴。 ○金子坂ノ石 大小悉ク燧石ニ丸。打バ皆火出ルト云リ。 ○年不取川 郷中ニアル川ナリ。イカナル霖雨ニテ。

水多キ年ニテモ。大晦日ニハ必ズ水涸テ。沙地ト成。正月二日三日ヨリ。亦水出テ川ト成ト云リ。 ○阿須ノヒバ 土人ニワダト呼ハ埋木ナリ。木堅シ。但大ナルハ少シ。出ル所アリ。六代山焼ナドノ跡ナルベシ。

○蛇骨 阿須山ニ出。竜骨ナルベシ。 ○金子山ノ煨冶石 土中ヲ堀テ煨冶ノカチクツノ如キモノ。出ル所アリ。六代山焼ナドノ跡ナルベシ。

○土團子 禹餘糧ノ類

一自房ノ有トコロハ。一座ノ高キ山ナリ。徑ハ僅カニ五町四方許アルベシ。高サハ江戸ノ愛宕山ヲ倍シタル程ナリ。房ハ中腹ニアリ。山上白鬚明神コレ郷中ニ鎮守トス。自房ノ傍ニ山上へ登ル道アリ。截石モテ坂トス。石坂三十六階登リテ。以シク足タリ有。又三十六階登リ。此ヨリ山石ノ坂少々上ニシク平地アリ。コニ白鬚明神ノ社アリ。社ノ向テ左ニ又々坂アリ。三十六階登リ。山石ノ坂少々上リテ。護法神社アリ。右ノ方亦々上リ行コト一町許。コノ所山頂ニテ。景色宜シ。亦一丁許ニシテ。富士仙元ノ石碑アリ。コノ所最頂ナリ。此邊ヤ、平面ニテ。四方ヨク見ユ。向ニ富士箱根。後ニ秩父嶺見ユ。

山ヲ下リ表ニ鳥居立リ一丈六尺此ヨリ前ハ青梅道往還ナリ
按スルニ昔時城跡トオボシク侍リ。

一自房ヲ金明山明樂寺龍藏院ト申候。

巳上

金子口馬

いづるいこてこゝあうの跡ゆはるに相るまの月

小を持原を回れを廻り侍りて

ことわくにたういあうのあ出う神もこ急をほくせむじりあ

跡を引て

打中秘く尾花う神あをれるかとおのあ秋の候をありきり

亭の門乃前二丁程ゆる小川を桂川といふ

秋の候はふあき月のかつ川うあもきよ死あはるうれう

待月

世と秋のあをたうをれを月まらうるに柱あうらな

十四日朝考の左をぬれれを中をうれて富士の祿

見ゆ

夫のあ八重山まき雪をれと富士の祿あにひふ朝あを

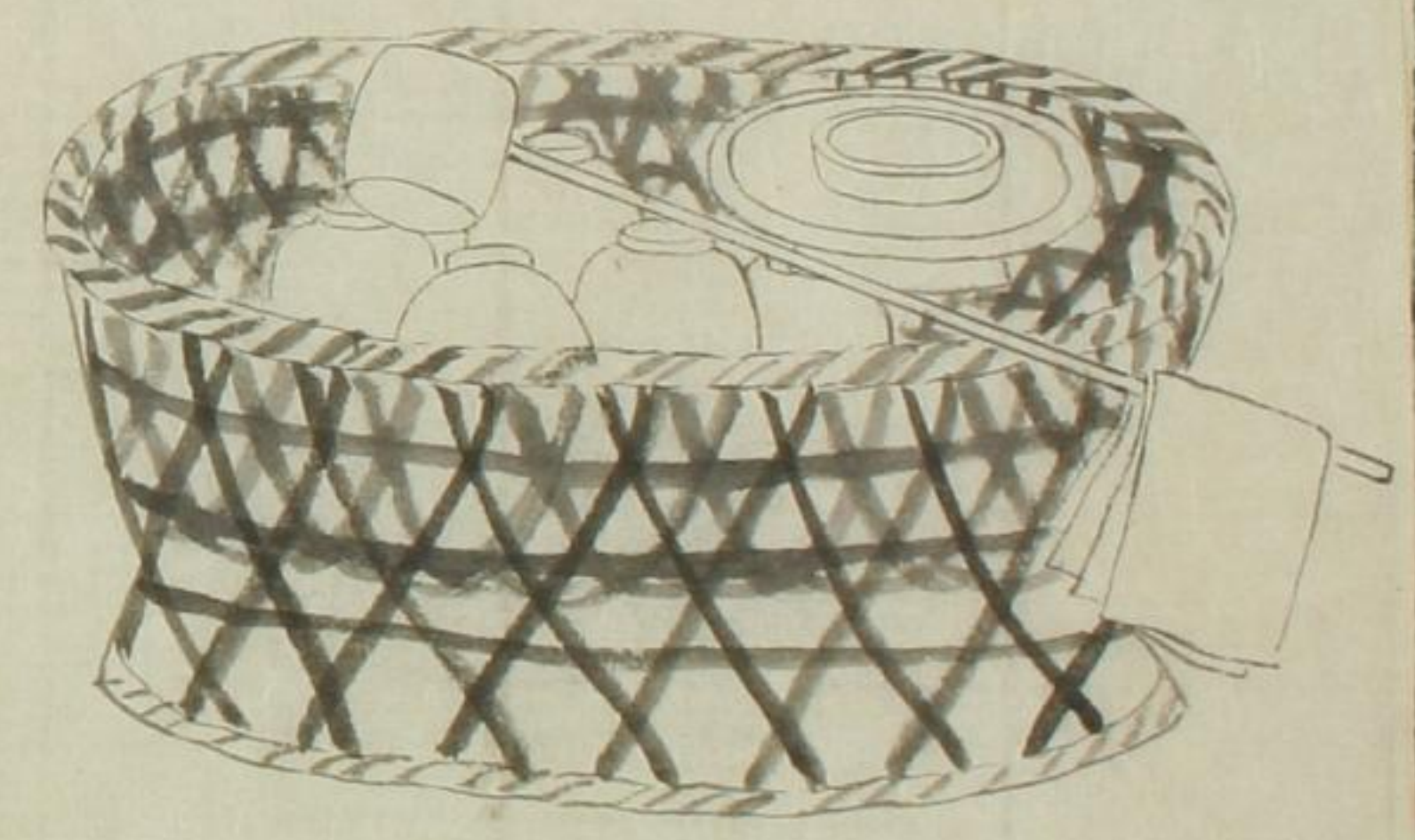
金子ハホとにわら田舎のてこういあそ古のむら

のうはまゆにえく侍あこそ

八月廿三日

行智

此籠ハ金子郷中にて
茶碗茶壺等と入り
燗壺小壺小茶壺等



縦 壹尺肆寸肆分
幅 八寸
長 五寸 肆分

○前正月ノ初カ。閻老龍野侯ノ邸ニ織田氏ノ婦人出訴シタル
シ云キ然メヨリ御吟味ニ及シカ。後流布ノモノヲ見タリ。迺茲ニ綴ス。
是等ヲ觀テ惟ハバ平右府ノ徳モ餘慶ハ無キカ。積善ト謂フ
當キ者ハ我カ日光大神ナル歟。

亥八月十六日封廻状

押込

江戸藩一平右府
歩外ノ不叶府邊
家茶壺燗壺押込

小普信組

玄目日向寺
杉浦玄泉叔母

志波

織田邊江守殿
隠居

不乃

武家名公傳
順安出

右邊江守家系

家老代

佐々敬象

同

同田五郎左衛門

大同片

榎田信輔

同

高山八左衛門

押込

勝子助定政

若川五右衛門

家老

生駒之丞

同

津田内膳助

急家呼り

用人兼帯

九里八郎左衛門

勝子用人

田邊五右衛門

言構

兼用人

山室又藏

急家呼り

同

林平左衛門

家老

田村要左衛門

押込

家老

秦壽四郎

山城守付

畠田権左衛門

家人

飯田忠藏

言構

同

菊池幸三郎

同

津田八左衛門

押込

兼帯

畠中知三郎

家人

須坂実茂三郎

分構

中在

田中栄次

急交叱り

目

小森又茂

分構

急交叱

上田彦市

急交叱り

徳目付

加藤幸六郎

脇坂

中務大輔家来

級長之上

用人

加集守吉郎

松平
伯耆守家来

押込

用人

川村又茂

中平

男谷彦四郎家来

横川七郎

分構

町奉行

大栗忠房守組同人

打田松吉

縁助又

神田家山所出丁目

分構

七右衛門

押込

女房 如

右に評定也。牧野備前守爲井能伊守等と山左衛門尉
柳生伊勢守立合儀前守中へ
月日不聞亥年ナリ。

中平之覚

織田道江
名代千村 澤正太郎

之方城蓋又隱居山城當安はのこ山城當子元の呼
 岩の中片両方を迎へ若下と家老と約之に
 仕成ゆをほの疑惑いしし出立延のこよひしり
 此中方のこよしし知を修打るゆはの附書松浦
 吉泉叔母志満後ほの難保く敵家母れん斗振小
 洲村之徳之服板中務大輔宅に近也洲いしし次弟
 之と志満之引居ゆ即歳後く此斗之標おの
 是と色をむ毒暇未若出を云用之て後方家
 田村要る馬の中居ゆ志満の屏風の標子に連て居
 り洲波へ入置或と長谷の押也若はのこ度く長

之に為り移同人志満一何者く若洲を兼るを
 引遠く此斗と志満と波へ是且又昔平年在ゆに
 存致ゆ即山城當の對面之於若下舟に子細承乳
 此更速感におよひし次弟と志満と若河邊と若對見合
 此標ゆ山形地女此方より若下船と對面ゆ波若下
 且去申年在色く申中洲の物出府為波舟舟
 若若標同人一何若下舟先津田同藏船中舟
 致ゆ此舟今心在若出舟とふ洲若山城當娘
 すかり家母は田島志若若女と志満同人に及ゆ
 此其未在舟と上と若下舟若女とい難唱之のこ

左内約より通家老に於て申すに
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行

織田山城書

名代井川飛騨書

此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行

此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行
此の形中諸家旅行

不及院中披于一波与江产表家茶生石中致山在在
追与吟味一任美山家之山好也世之格馬也因之
世之山家世之有之書付德又水原山原寺不世之
至亦依之世之德也 作付

右於水野致若書致山免山同人山作原且山脚書名代
山作原之節也太田備後書致山列在

子正月十七日泐汰書

織田邊江書

名代織田謙次郎

法草新寺町致若書涉用并家作也一与管上其三四

山間初中總書致也一与三四坪家作也其也
右於波之書掃初次老中列在致若書中一也

間初中總書

大石小路松平左京亮致也家作也一与三四坪家作也其也

致也家作也一与三四坪家作也其也

右於莫也抄

松平左京亮

大石小路致也涉用并家作也一与三四坪家作也其也
織田邊江書致也家作也一与三四坪家作也其也

右致若書宅一也家作也其也書付相也

予ガ輩ノ云ベキナラズド間侯ノ家ハ。文廟ノ始猿樂ヨリ起テ。御他界ノ後ヨリハ世ニ隨テ蔭モ無キ形トナリ。今ニテクモ何ヤラ不首尾ニテ遠方ニ住レシ由ナルヲ時社有テ當総州ノ出身ヨリ追々京尹ヲ登テ閣老ニ移上リ。不首尾ノ宅モ高第ニ遷ラレ江州ノ邸ハ予モ嘗テ度々往来セシガ以前ヨリノ古屋舗ニテ彼祖父四位モ富ナラス半ハ荒タルガ後又類焼ニ遭タリト覺ヘ左京亮ガ父ハ近頃ニテ閣老ノ筆頭ナリシ泉州ニテ為スイモ無ク上席シ次坐ナル水越州年若ニテ御勝手掛ナリシガ遂ニ泉州モ黄泉ノ宇ニ改メ織田ガ弊邸ニ遷ル杯世ノ流轉トハ云ナカラ其移リ変ルサ何レモ其應ヲ得タル歟ト善惡ノ世論ナキ愚隱ノ評コソ人奈ントカ聞クヤ。

子庚

○コノ春ノイニテ世上ニ大城御不例ノイ有リ杯風説セシガ妄語氏聞コハズ正月廿四日ニ御臺所薨去ト諸氏へ仰出サレ因テ憶ヘバコノ君ハ過シ頃大叔父ナル越前守京都へ御迎トメ上リ木曾路ヲ御下向アリテ東武ニ入ラセ給ヒシサノ宮トカ稱シ奉リシ姫宮ニテ坐マシキ夫ヨリ廿七日御中陰ナカラ同姓和州ノ方へ所用アツテ往タル中此度ノ御イ恐入タリ迎其舊記ヲ閱セメタルニ。

文化十年酉十月晦日。御簾中様御安産。若君様御誕生。
御簾中様トハコノホド未ダ
西城ニ坐シケル時ノ御称ナリ
文化十二年亥二月十七日同御安産。姫君御誕生。

文化十三年 子十月廿三日 同御安産 姫君御誕生 同日御逝去
文化十四年 丑八月廿一日 同御安産 姫君御誕生
然レバ 関雉鐘鼓ノ御操ニヤ坐シケン 就テ予ガ方ナル 記録ヲ見
ルニ 此君 寛政七年卯六月十四日 御誕生ト有レバ 文化十年 酉ハ
御年十九 然レバ 乙亥ハ廿一 丙子ハ廿二 丁丑ハ廿三 當天保十一年ニ
至テ 御年四十六 哀惜奉ル哉 噫

追記

御皇所 御父ヲ有 栖川中務卿 織仁親王ト申奉ル サノ宮トハ
樂宮ト書ナレ 越州京へ上リシハ 文化元年 甲子 姫君九月三日
京ヲ之セ給ヒ 其廿一日ニ 江都へ御著輿 御本丸大奥へ入ラセ給フ

ト 此時御年十 又御婚禮有リシハ 其六年 己巳十二月朔日也
御年十五

○水戸殿ノ英才ニ坐スハ 都下ノ所知ナリ 疎此度御願ニテ 水府ノ
駕ハ二月ノ初旬トカ告有リシヲ 頓テ官ノ御中陰ニ成ルベキ故カ 俄
ニ正月ノ末 癸駕迎 甚トリ 騷キ 弥廿三日ト云イニテ 某等ガ千住
へノ御送モ 堅ク停ラレ 其夜深更ニ 癸途トノ告ナリケレバ 御見送
トメ 家士ヲ小石川ノ御第へ遣ス 時ハ曉八時ナルニ 公ハ馬上ニテ 御
旅出ナリ 成ホド 先日モ 御物語ノ如ク 略装ト思シク 前行ニ 黒雞
毛ノ槍一本 鉄炮十七挺 御馬ノ後ヨリ 弓三張 從行者ノ後ニ 牽馬
士匹 此餘ノ 群士卒ハ 平常都下 從行ノ人數ニ 違ハズト 又 公玄關

改るんを私うくしてハ國務任うくたれハ遠き執居
せうとすとのりぬりも好いち門戸を閉ておき
後より尾張の國よりつりておそくおや。明和元年十月
八日六十九歳めてうせぬ。

年録

元文四年三月十四日。松平但馬守。於御座。間尾張敏家督
女作也。

松平大守

松平播磨守

松平安藝守

右三人尾張敏家上使多き。

右ノ趣ハ。德廟ノ御時ナリ。蔭ナガラ。今ノ有様トハ殊ナル若ク
思ハル人克ク諸ヲ思ハ。

コトニ就キ先年林史ガ語シヲ念出シタレバ云フコノ尾公ハ。越テ
德廟ノ紀ヨリ大統ヲ継ガレシイヲ念^{イカリ}給テ心外ノ御イヒ多カ
リシヲ。德廟ハ聽給ハ又御体ニ打過ラレシニ。或日縁山御廟^ノ参
井尾公ハ其病坊ヨリ。御靈屋へ通御ノ御行装ヲ坊ノ堀内ヨリ
公然ト臨見セラレシヲ。輿中ヨリ見給ヒ仰ニ。自餘ノ不禮ハ其
身^キ限リ又ハ三家ノ御備モ有レバ。看過モ爲ベシ。某ガ御靈屋拜
参ハ。德川家ノ大禮ナリ。然ルニ尾公ハ三家ノ先ト雖也。昔ハ尾紀

今ハ徳川大統ノ某ナリ。然レバ祖先ニ對シ奉リ。其終ニ寔ベカラス。迎彼三氏ヲ召サレ。右ノ命令ナリシト。何ニモ實語ナラン。

○予ガ左右ノ者。或屋形ノ畫臣ノ宅ニ往テ物語セシ中。云フ其老疾先頃小石川ハ召サレテ往給フ杯云ヨリ。話スサテ水府ニテ道行三日程ナリコノ度ハ二日ニ御着府ニ。其途中公馬上ニテ行給シト。是ヨリ水府ハ御着ノ井ハ御待迎ノ諸士輩ハ悉ク甲シ服タリト。又今年春御具足開ノ井モ諸士皆甲曹ナリシト。予惟フ殿ノ英氣ハ仰ギ申セ。君子中庸ヲスナレバ。何ニモ御失ナキ。ヲ禱リ申セリ。

○經營日成録ノ補遺モ度々ナリシガ。又當春御賞聲アリ。

其沙汰。

子庚

二月十二日。

巻物五

所奉事

土岐丹波守

西丸沙堂後所用。依初可後分沙五調方

格。各油封心ヲ用。取。各。封。心。封。心。封。心。

右於芝蓉ノ間。掃。初。以。老。中。別。在。大。坂。路。中。傳。

浪七枚

所大工

村上兵五郎

同封。封。心。封。心。

右於沙堂初録類。紙。若。中。傳。

所校友

黒子常三郎

二六 齋 興成堂藏書

同五枚元

依級

赤城新巻
石来与多清

同制...

右打焼...

○大坂落城ノ牛秀頼薩州へ逃行其蹟アルノ前ニ云ヘリ實事
ナルト見ユ然ルニ頃口聞ク領内地方志佐ト云處ニ秀頼藪ト呼ハ
所在リト若クハ薩州ノ途暫ク此處ニ隠レ居タルヤ訝シ

子庚

○前ニ録セシ大城ノ御臺所カクレ給テヨリ正月ノ廿五日ニ御使ト
メ閣老脇中書ヲ日光准后ノモト入遣ハサル御臺所御遺骸御
葬ノイ仰ノ旨是ヨリ晦日ニ中書ヨリ達アリテ御牌号ヲ淨觀院様
ト稱奉ル旨又二月朔日ニ達アツテ淨觀院様其六日巳下刻御出棺
ナリトコノ後世上風説區々ナルヲ聞クニ録セリ
御城内ヨリ上野ニテ御道途ニ兩側ニ幕ヲ張り其間ニ席ヲ
敷續クイトツ

上野廣小路ノ三枚橋ニ其橋間ニ又假橋ヲ設クト
又清水門ヨリ袋谷夫ヨリ御靈迄ノ道ニ疊ヲ鋪續ト
其前上野ノ邊ニ往者ニ何カナル体ヤト託シタルニ谷ニ彼前道廣

小路ノ處見渡シ直行一面ニ砂梨ヲ敷タリ但シ東側ハ五間許
リ西側ハ九尺許リハ常ノ如シ砂梨ヲ敷クベキ地ハ一尺餘ヲ掘テ
砂梨ヲ入レ堅ムト予惟フ御柩ヲ輓ナレバ斯ク爲ルカト

三枚橋ノ處假橋ト云ハ新ニ板ヲ渡シ其ニ土ヲ置砂梨ヲ敷地
面トヒトシク爲セリト又下説ヲ聞クニ御柩ノ大サ六帖鋪バカリニ
車ニテ輓奉ルト斯レバ是ニ側奉ル者多人ナレバ常橋ノ左右狹カラ
ガル設カ又中央ナル常橋ニモ橋上ニ新板ヲ施トカタク御輓車
ノタメナル當シ

右ノ三橋ヲ渡セル堀川ノ見通シ池ノ方ト下谷ノ西方ニ梁ヲ架
シ板塙ヲ爲シテ見入レ無カラシム

又御柩橋内ハ池之端通シ行カセラルユエ道ノ不直ヲ平坦シ
先ハ清水門ニテ道造メ砂梨ヲ敷ク如前

コノ先ノ松平豆洲が下部ノ處崖アルヲ兩方ヲ五尺幅ツ切
崩シ道ノ幅九尺ホドモ弘マレリト

清水門内御靈屋ノ御門ニテハ砂梨敷キ如前ト
右御門前ノ廣場ハ縦十間餘横五間許ノ小板屋脊板壁土ノ
舎建テ地面ハ御行道ト同ク砂梨ヲ敷ク

匠云此場ハ日光宮御誦經アル處ト此餘ニ御門内モ亦如此
場三重構ノ處有リ又光宮ノ御經處ナリト

又御本坊内ニモホド廣キ假舎ヲ建ツコハ掛リノ諸役人ノ司

處ト云。

又御普請ノ造作場トテ中堂ノ後ニ竹柵ノ圍アリ。

御通極ノ道ノ横路ハ總テ違障ヲ作シ竹柵高街ハ板塀ヲ以テス。

右ノ如クナレド山下ノ茶店又ハ同所ノモセ物場ナド常ノ如クナリ又山

玉山ノ茶店モ常ニタカハズト。

御掛リノ閣老脇中書ハ此時ニテ三次同ク寺社奉行松伊州其外

ノ有司氏ハ同ク毎日檢視ト脇中書ゴノ日モ亦見エト。

言フ道作ノ砂梨平生ハ僧一坪一圓ニ方ナルガ此度ハ三圓ニ

登レリト。

右道作池ノ端ハ東叡ノ御入費其他廣小路等ハ町費ナ

リト。

件ノ道作ノ人數又御葬事ニテ上野へ往來ノ者多勢群散

ヲ觀ルニ平常出火ノ中馳集ル諸人ヨリモ譟囂饒々シト。

町家ハ御葬送ノ前夕ヨリメ家人共悉ク他へ出シ空屋工火

用心ニ人残り居戸ノ閉シ置ト。

誰カ云ケン右薨去ノ御當日大奥ニテ布五萬端御入用ナリシト。

信ジ難キ也若クハ誤聽カ。

前ニ云フ道作りハ御成小路筋違御門通り小川町一ツ橋通り

平川口迄ハ砂梨鋪前ノ如シト。

又道作り檢巡トメ前々日カ市尹行視セシナリ。

筋違御門内ノ屋鋪々々ハ長舎ノ外溝ニハ皆板モテ溝蓋ヲ為
スト何ナル為ヤ

御道筋ナル諸邸ハ何レモ長舎ノ燻ヲ塞外ヨリメ目貼ヲナスト

町家ハ居樓ノ戸ハ閉テ目貼ヲシ庫有ル家ハ庫ノ土扉ヲ鎖ト

御行道ノ左右ハ幕ヲ張ト覺シク悉ク幕串ヲ建ル設アリシト

人聞ク御城ヨリ上野ノ山内ニテハ總メ御幕ヲ用ユト

其前日ノ前夜雪降タルガ御當日前ユエ道路ノ掃除トメ小役

人多集シ町役人モ多人衆出テ指揮セシカバ雪景ハ必シモ有ラ
ザリシト

其日上野へ御着極ハ未ノ頃ナリシト

又聞ク赤衣ノ僧四十人黒衣二十人御行列ニ立シト

又御靈屋ノ御門前ヨリ奏樂ニテ御葬處へ渡ラセラルト役丁ノ者語

御葬所ニテハ三丁程モアハシ又女貞御供ト
聞コヘシガ女貞ハ見ヘサルヤウニ覺ユト

清水門ヨリ御靈屋ニテ御行道ニハ翌日モ幕ヲ張ルト

黒門外ノ御敬言衛山下道ハ酒井左衛門尉忠器仲町路ノ方ハ

小笠原大膳大夫忠固

御柩御途中ハ昇丁三百人御靈屋内ハ百五十人ナリシト

問老脇中書太田備州ノ上野退散ハ亥ノ刻ニ及ブ其餘ノ諸氏ハ

尋テ陸續々退引ナリト

御出棺ノ片火奥ヨリ平川御門ニテハ御柩ヲ車ニ載セ奉ルト

三枚橋ニ渡シタル假橋ハ翌日取拂タリト。

彼辺ノ茶店云シト。廣小路アタリノ町人其夜更テ帰屋セシモ有リ。又明日ニ及ンテ帰リシ者モ有シト。

六日ノ御當日根岸ノ連歌師へ人行シガ途ニテ過テ往テ能ハス。因テ證札ヲ示メ其禁ヲ脱スト。

右ノ宅ニテ語ルヲ聞ケバ小吏ガ言ニハ御葬行ハ午時過ニテ光宮ノ御引導ハ申牌過カト。又御役人方當山引取ハ今夜ノホドカ知レズト云シ。

廣小路ハ當日申半刻過テ路禁ヲ免タリト。

大川橋ヨリ彼方ハ町家皆戸ヲ閉シ高價ヲ止居レリト。

予ガ莊辺表町番場アタリノ往還ハ他所ノ者見ヘズ。處ノ高買ハ常ノ如シト。

大川橋ノ見通シ船ノ往来ナク御厩川岸ノ渡モ船停ナレド大川橋ノ通路ハ停メス。

坂本ヨリ田原町三丁目ニテハ木戸ヲ鎖シ小扉ハ開アリテ往来人ハナシ其處ノ屋内ニハ平常ヨリ家人多ク井レド皆戸ヲ閉テ元朝ノ町家ノ如カリト。

田原町山下通ノ路次ハ木戸ノ扉晡時頃ヨリ開キ往来セシト。池ノ端通黒門前ハ申半刻ニテハ往還ノ人ヲ過メタリト。御葬事ハ晡時過ニ畢リタルト人傳諾セリト云。

右ノ船ヲ智ル風況云々

如司人 右ノ船ヲ智ル風況云々

右ノ船今日入津信船以ノ業院人申比如司人海ノ中ニ
少過和解任者申比以上

庚 閏六月書

右橋助 西 幾十郎

中山外三郎 橋林常

即番船風説書

一當年未船ノ所業院船即艘六月八日咬吸也一因出航仕
八日信船仕信書乘後海上云云案今日即南地志存
仕右即艘ノ船船信書云々

一昨日於洋中唐船之艘見掛出

右ノ船昨日入津ノ是者船船以ノ業院人云風況申
少過和智ル風況云々

如司人 右ノ船ヲ智ル風況云々

右ノ船今日入津信船以ノ業院人申比如司人海ノ中ニ
和解任者申比以上

閏六月書

右橋助 西 幾十郎

中山外三郎 橋林常

覺

六月八日出船閏六月四日三日教世旨海ノ中ニ

一此即於臺灣邊意唐船教艘見據中其船之日而後海之船
又及是後亦也

亦亦相習風況亦也

古のりん 古のりん 古のりん 古のりん 古のりん

古のりん 古のりん 古のりん 古のりん 古のりん

右務助 西 第十部

右務助 中山作三郎

榎林常英 中本殿吉郎

印番船風説書

一為年春船の向業院船印艘五月十四日咬吸吧一月出帆江日敷
八日程船は見離中其米津南國見據中其霧津く長崎に
入港く合速くは舟意中其日方並日中通高旗建漂以
名在在田所設船教艘邊岸外舟右船日中其船津岸設以
中其書籍之田所領中其舟速く田所設船在通河田所設以
中其田所設以田所設今日無別系田南地忌存法右印艘中
船船田所設以
一此節於臺灣意唐船教艘見據中其船之日而後海之船
又及是後亦也

一去年ハドニペドロの娘ドナリヤとヤサボニ
ホルトカ
國の王都の評決ニ物テ女王ホナリヤ依テ右王の兄弟ドニギ

エール王位の争ハニ離レ終ルハ年々宛然トシテ
右女王ドナリヤ依リスサボニホナリヤ依テリクセニベルク地のヘル

トク官アギユストトシテ去ク聲ト以テ多ク
一去年ハドニスハニヤ國ヘルテナント第七世の王の實女リスサバ

ルヲ女王ホナリヤ依テ王の兄弟ドニカルロス王位ニ嗣ク
年々依テ来今ハ國中不穩シ

一フランス國の都バレイス及ヒシントエテイー子レオンニルセイニ
不於テ國王の改革ヲ共セシメテ為シ強クナルヲ以テ軍云

紙出シテ抄取ルヤム

一去年エゲレス國のフリスルコトホナリヤ依テ
館舎數多破却シテ

一トイツ國王前年三月死去シテ
一前年ハク咬喉巴地方地震烈甚方ノ損亡甚

一世節於洋中唐船見擱ルヤム
一咬喉巴表各官各邑紛擾ニシテ

有クハ不穏ナル風俗ニシテ
如シク よそん

古ノ級形ハハ業地ハハ如シクハ争リヤ
古通和解ハ業地ハハ

石橋助左衛門 西左五郎

六月廿八日 中山作三郎 橋本常左衛門

中本茂左郎

天保七年丙申

風説書

一 尚年来初、阿葉陀船を駛五月十三日咬吸吧出帆は海上高条
 今日阿葉陀船は右左艘、亦船は左の船
 一 去年阿葉陀船帰帆は十月廿二日海上に滞咬吸吧船は
 一 歐羅巴諸州若布多色河也、程、此船は右の船、ハニヤ國にた
 一 八王位と讓り、御舟、御舟、後、今、平穩、成、不、中、

一 咬吸吧地方阿葉陀高館より、ハニヤ島、去年九月廿三日曉八
 中、時、以、大、地震、同、如、城、邑、悉、皆、震、り、也、中、

一 去年中、本國、咬吸吧表、宣、候、ハ、上、レ、ニ、又、同、如、也、子、ラ、ル、候、ニ
 右、候、交代、は、先、候、ボ、ウ、ト、候、ニ、去、年、阿、葉、陀、船、は、右、船、中、

一 阿葉陀國王、御軍艦、三、宗、西、布、多、アメリカ、小、島、阿、葉、陀、高、
 館、為、巡、見、宣、候、中、ハ、本、年、中、時、宣、候、咬、吸、吧、表、ハ、右、候、一、年、

一 存、在、
 一 ドイツ國、帝王、位、を、辭、シ、王、子、位、を、讓、リ、中、

一 去年、中、上、ル、ボ、ル、ト、ガ、几、因、女、王、ノ、聲、を、お、成、名、若、婚、姻、候、病、分、率、

去法

一八ノヤ国王去年嫡子ニ世ヲ讓ル

一去年七月三日フランス國ノ都ハレイスニ在リテ国王ロデウエイ
キヒリトス父子ノ通好ト見越ケテ階ノ即拾五挺ノ銃砲ヲ打
放ル事附添ル者ノ内拾六人即死拾八人ノ負傷者大幸小
シテ国王父子ヲ危難ト免シ其後吟味シ上級以テ若キ人
ヲ擔ル者兩人刑罰ノ科ルル事亦甚高銀若咬咬
吧表格ニ由ル

一西節於大洋唐船即艘及臺灣等ニ在ルル者數艘見掛ル事
日本色高ノ船トハナク事

有ノ船ヲ警ル風況云々

かきん よん種急急とうわんあい海ん

有ノ船今日入港船政何蘭人ナリ如クハ承リ中上ノ色和鮮
仕居上中以上

右格助左馬 西 幾十郎

申 六月十二日 中山作三郎 橋本景左馬

右格助左馬 中本茂吉郎

天保八年 丁酉

風説書

一當年第船ノ石蘭院船ヲ被立月廿六日咬咬吧出航は海上ニ別業

今日所商地是存ははたき艘し外頼船をたれ

一去年所商地が帰帆は十月廿五日海上に滞咬吸吧船は

一歐羅巴諸州を官家意の船も秘にたれは去年中よりスバニヤ

國王讓位し候旨を發せ候年今以平和にお成不申

一去年の六月和蘭國王し孫軍艦をより五月廿六日船はは末一カ

サル及びモリユクス諸島に在候中

一去年の六月フランス國王ロトデウエイキビリス父子し若を危難と

お免れ候し後又し悪心し者おたれ候命しお然に候し候

ゆゆもそのお通し女魁首アリベアウミヤ若を捕お戒中

一ナウセン國王アントンセレメンステッドールと申者去四月廿三日齡八拾

一歳を世に辭し揚フレテレリツキアキユストと申者も跡以嗣中

一ホルトガル國女王柄と執國中は好溢と申

一此節に洋中唐船見候不申

一若く外水留り風況をたれ

かおん よん種は急をうんぬんぬん

一若く後今日入津は船の蘭人かたかおん承り申若く色和解

は若く申以上

右橋助左衛門 西長十郎

角七月四日 中山作三郎 橋林業左衛門

右橋助五郎 中本庄三郎

天保十年^己

風説書

一 為年未詳、向華院船を駛五月廿日咬吸吧出帆は海上を航
今日御南地志居は右を駛く船船を航

一 去年御南地、帰帆は十月廿二日海上を歸咬吸吧を航は
一 ドイツ國、角オーステレイキの帝ロニバルデー^州ス^州、^{歐羅巴}及び
ヘ子^全キヤ^上く、幕館は

一 ドイツラントより有く、エケレスの領地ハニオーフル、後エケレス國
王、波後當時キエブルラント侯、支配となり、中、侯を即ち波
たるエケレス國王、第三男、少

一 去年のオイス、パニヤ國、鐵軍今以平和を成、中、尤其の歐羅巴
諸國、秘、此、

一 メキシコ^{南アメリカ州}人等フランス國、領を奪、中、其、史を、
為、鐵軍、波、後、フランス人等、メキシコ、港口を、許多の軍艦、
圍、其、末、ヘラキユルス、といへる、城、邑を、大砲、を、以、打、撃、
一 去年のオ、アメリカ州、の、エケレス國、に、配、中、カナダ、と、
稱、證、を、成、中、

一 於廣東エケレス國人等、向、以、密、賣、中、を、禁、せ、ん、為、
と、差、越、し、其、地、を、治、る、所、の、所、以、と、恐、不、意、
命、を、倣、て、是、を、治、る、歐、羅、巴、州、の、人、等、大、
窮、苦、せ、り、其、末、於、支、那、國

御所より阿比を賜ふ者より之を孰きも刑より免へしと命
令あり其中よりは世命令起きし者ハ嚴科より免れぬ
一去年中上皇和蘭國王と御軍艦より咬吸吧表ハ
一色編歴して終り去年の昔之志和蘭本國に
一フランス國王と嫁一男子と産其子フランス國の嗣子
一世節於臺灣島唐船被り見たり所由國上色高し船は
お見へおれ

お見へおれ 急でゆふやがうんでせん

有る船今日入津は船次ハ葉院人の中におり承中上は色初解上

口外

六月廿四日 本木留左衛門 中山作三郎
右橋助十郎 坂吉次郎

五月廿日出船六月廿四日回敷二十音鐘入津

一阿蘭陀船咬吸吧出
人数四拾四人内 四拾三人ハ葉院人 一人ハ
以上

○前二御葬送り記セシ後又或人云ニハ其日御柩ヲ昇シ者大勢
ナルニハ筋違ヲ出ント為シ片昇丁ノ中間ニハサマリシ者ハ動ク
一能ハズツブルハツブルト叫ビタルニハ御輿添ノ役人喧シキヲ制シタ
レニ聞カズ功者ノ人足ヤウクト工夫ノ苦難ヲ脱レ使タリト又云神

事ノ御輿。其他重荷ナドハ夫丁皆々面々ニヨイク。或ハ云云ト聲ヲ
発シ行クユエ。重キヲ覺ヘサレド。御輿ハ聲ヲ出ス。イフ禁ジタレ。昇
丁共無言ニテ歩行ユエ。殊更ニ重キヲ覺ヘ。疲テ進得ザリシト。

又道造リ逆。御行道ヲ。俄ニ土ヲ運ビ作成タルニ。前日雪降タレ。御
當日ハ暗タレ。数人ニテ踏イユエ。途ハ泥濘トナリ。足地ニ入ルイ。數寸
因テ御輿昇。殊ニ難。故メ困窮ニ及ヒシト。

又小笠原侯ノ人数ハ。御固トメ行路ヲ衛リ。井シガ。御輿御通りノ井ハ。御
昇丁其餘御輿廻リノ人多ク。路中ニ井ルイ能ハス。警言固ヲ路ヲ辟テ。溝
中ニ立井タリト。予思フ。御輿三橋ヨリメ。ハ池ノ端通り山内ニ赴カセラレシ
ト云ハバ。定メシ。笠侯固ノ者共ハ。蓮池ノ邊水中ニ入テ。固立タルナラシ奇

事也キ。

又下説スルハ。御葬儀ノ段々ハ。使ヲタテ。言上ニ奉シテ。御棺ノ御葬地ハ
入ラレ畢タルヲ。言上セズ。上ニ知ロシメサレガレバ。御上下御着ノ。御待井
給ヒシト。予云。然井ハ掛リノ。閣老其外ノ退シハ。初夜ニ過タルニ。何ニメ其
ト上聞セシヤト。答フ。定メシ掛リノ御目付ナド。早ク還シガ。御葬式ノ終シ
ヲ言上ノ井。次ニ知シメサレケン。恐入タルイ。ト云ヤ。

後聞ク。御棺ノ重キ四百貫目。既ニ御葬地ハ下ニ奉ラシト。爲シ井。重フ
メ自由ナラス。然ルニ衆人無言ナレバ。猶更難。故メ。降地ノ四維動カズ。夫
丁曰。キヤリヲ唱ルニ。非サレバ。人カ一齊ナラス。冀クハ。唱ヘン。供奉ノ人許サズ。
已ニ張綱絶ヘシト。爲。通キヤリヲ免タル。同音一和メ。御棺次底ハ安シシ

今已后刻御書院へ出御

京 知恩寺

増上寺住職 大僧正

右於御前名作付之

コレハ先日雲暗ニ往タル牛聞シハフ知恩寺ノ方丈年來行状正シク
如法ナル僧ニテ何カ人祐ノ起念加持ナド奇驗有リシ杯語レルガ果メ
然ル故カ是寺彼ノ穩密ト云ヨリ興リ竟ニハ大臣言上ナド經歷セ
シナラン

又靈巖傳通鎌光ニ非ズメ京ノ斯寺ヨリ縁山ニ到リシ例モ何年
ニカ有シイ語聞シカ今忘レタリ

増上久シク無住タリシイニ就世ノ流説ノ云云ハ

檀林ヨリメ他モ其寺ニ居ル僧十五歳ヨリメ其身本何者ナルヤ俗姓
寺社奉行ヨリ質問アルイ

コレハ世ニ梵嫂ト云ノ子直ニ其父僧ノ弟子トナリ其寺ノ僧侶ト
ナル者ヲ知ラン為カ

又縁山ノ役者二人奉行香山氏呼出シニ因テ其郎へ往シカ直ニ揚リ
舎入りニ為シト云

コレハ不如法ノ聞コヘ有ル者ハ一端尋アリテ申開キニ據テ罪ヲ獲
レバ心得タル僧ハ申譯ナキイ有レバ出奔トカ身ヲ隠ストカ為ルイナ
ルヲ平常ノ呼出シト思ヒ等閑ニ出デト逆罪ヲ得タルト云

或云山内ノ寮十八所カ俄ニ無住ト成レリト。

コノ無住ト成ルトハ此度一統ニ寺僧ノ身本質ニテ問ニナリテ何カ行跡ノイニモ及フ聞又有レバ是ニテ不行状女犯等ノ者ハ露頭スベシト皆出奔メ寮主無キイナリ。

又出奔僧ノ中一人ハ平常行状モ正シク僧道ヲ守ル者ナリシカ此度方丈ノ住職モ久シク空位トナリ今諸寮ノ主モ逃去ルイ淨宗ノ恥辱コノ時也。以来縁山ノ居在ニ志ナシ迎自ラ厭離メ出テ去シト。

又云或檀林モコノ謀ニテ無住ト成レリト。

コノイハ其寺ニ七八歳許ノ女居タリ是ヨリメ不審興リ段々ト尋タレバコノ女ノ親ハ芝三田辺ノ者ナルカ其者ヲ町名主ノ株ニ金五十兩

出シ買遣ハシタル者有リコレ彼檀林ナル由露レ。因テ退院セシト。定シテ穩密ヨリ顯レテ例ノ女犯ノ沙汰ニ及ヒタル者歟。

コノ度ノ譯ニ止有リト聞コハ所化僧ニテ山内ノ出行モ憚ルイトゾ右ハ所化バカリニモ限ラズ小僧ニテモ出行ヲ為サズト。

右條々ノ本ハ上ヲ誣ルニ似タレモ風説スルハ御本城ノ後宮ハ御宗旨ノ淨土信仰ニテ西城ノ妃員ハ故有テ法華教ヲ崇ニル由因テ淨宗ヲ嘲辟ルヨリ起リ何カ事實ニ及ヒ是ヨリ彼宗ノ僧正ニ至リ夫ヨリ檀林下ツテ山内ノ諸寮次テ小弟子輩ニ流轉セシ者カ要スルニ凡下ト官上ヲ議スル黙メ可也。

